

先史時代の右・左

岡山大学大学院社会文化科学研究科 教授
松本直子 (まつもと なおこ)

Profile—松本直子

1968年、福岡県生まれ。九州大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は考古学。著書は『縄文のムラと社会』（岩波書店）、『認知考古学とは何か』（共編、青木書店）、『認知考古学の理論と実践的研究』（九州大学出版会）など。



右と左の問題は、考えるほどに奥が深いテーマである。人の身体は、一見左右対称のようで、完全に対称ではない。右手と左手は、同じようにみえて、力や器用さにおいて異なっている。その身体的経験がさまざまな文化的解釈を生み、そうして形成された意味体系や規範が身体的経験を制約する。ロベール・エルツは、聖／俗、生命／死、光／闇といった二元論的な思考に取り込まれることで、実際の力や器用さの違いを超えた象徴的意味が右手と左手に付与されると指摘した（エルツ、1980）。ヨーロッパやアフリカ、北米先住民の事例では、右が強さ、神聖さ、生命力や正しさと結びつき、左が弱さ、穢れ、死や邪悪さと結び付けられているかを論じている。こうした「右手の優越」は、右利きが多いという単純な理由では説明しきれないということを看破したのがエルツの論文の重要なところである。

たしかに、右利きの人の身体感覚は、左右の象徴的意味の根拠のひとつには違いないが、そこに付与される意味や規制の内容、程度にはかなりの文化差がみられる。中国の唐代には右よりも左が上位とされており、その思想は古代日本にも導入されたため、朝廷では左大臣のほうが右大臣より位が高かった。中国の神話では、盤古と

いう神の左目から太陽が生まれたとされ、日本神話でも、太陽を人格化した天照大神はイザナギが左目を洗ったとき、ないし左手で鏡を持った時に生まれたとされている。日本の朝廷では左大臣のほうが右大臣より上位となっている。

左右の象徴は、ジェンダーと結びついていることもしばしばあり、男性が右、女性が左と結びつけられる事例が多い。女性は統計的には男性より力が弱かったり、身体が小さかったりするが、個人レベルでみれば男性より強い女性もいる。右利きの方がマジョリティであることは普遍的だが、左利きの人もある。生物としての生得的な傾向と文化的認識や制度との関係を考えなければならぬ点において、左右とジェンダーはよく似ている。文化的な規範によって、たとえ左利きであっても左手で食事をするができなかったり、女性だからという理由で土俵に上がれなかったりするわけだ。ちなみに、東洋哲学の陰陽論では左が陽で男性と、右が陰で女性と結びつくので、左右とジェンダーの関係も一筋縄ではいかない。

私が左右の問題に興味を持ったのは、大学院生時代、シルクロードの考古遺跡をめぐる指導教員の調査に同行したときだった。新疆ウイグル自治区のウルムチを拠点に、ジープに乗ってアルタイ地域

の遺跡を廻るなかで、岩絵群の踏査も行った。モンゴルから中国の内モンゴル自治区にまたがるアルタイ山脈には、露出した岩の表面に動物などを描いた岩面画が点在しており、一部は「モンゴル・アルタイ山脈の岩絵群」として世界遺産にもなっている。岩絵の年代を推定するのは難しいが、古いものは1万年以上前の旧石器時代に遡り、新しいものは西暦9世紀ごろまで、断続的に描かれたとみられる。岩絵はペトログリフと呼ばれるもので、先の尖った石器や金属器で黒っぽい岩の表面を引っ掻いたり打ち欠いたりして表面をはがすことによって図案を表現している。

岩に描かれたヤギ、シカ、ウマなどを見て回るうち、右向きに描かれているものが多いことが気になりだした（写真1）。そこで、帰国後に描かれた動物の向きと画法などについて分析してみたところ、やはり右向きに描かれているものが多く、とくにシンプルな線画風のヤギにその傾向が強いことが分かった（松本、1996）。

動物の向きが気になった理由は、自分が動物の絵を描くときには、とくに制約がなければ左向きになるからである。動物や人の横顔を左向きに描く傾向は、少なくとも現代日本社会では一般的なようである。動物や魚の図鑑に掲載



写真1 右向きに描かれたシカとヤギの岩面画

されている絵も基本的に左向きだし、焼き魚も左向きに皿に乗せるのがお約束になっている。

右向きの顔が描きにくいのは、右手で筆記具を持った時の線の引きやすさが主な要因となっているようだ。左から右への線が描きやすいので、動物を頭の方から描こうとすると左向きになる、また、円を画くときに左に膨らむ部分はスムーズに描けるが、右に膨らむ部分はきれいに描くのが難しいので、左向きの横顔のほうが描きやすい。この点からすれば、大きく湾曲したヤギの角も、左向きのほうが描きやすそうに思われる。ただし、もしノミを左手にもって右手にもったハンマーで叩きながら線を彫りつけるとなると、話は違って来る。これは右向きが卓越する要因のひとつかもしれない。

私たちにとって左向きの方が描きやすいもうひとつの要因として、書字方向との関連が考えられる。欧米諸語や現代日本語は横書きの場合は左から右である。動物などを描くときは、描き始めの頭が左向きになるというわけだ。それならば、アラビア語のように右から左へ文字を書く文化の人は、動物を描くときも右向きに描くことが多いのだろうか。この点、残念ながら追究できていないのだが、アルタイ岩絵で右向き傾向が

顕著な線画風のヤギは、突厥文字を伴うことがあり、突厥文字を使用する人々によって7世紀から9世紀にかけて残されたものである可能性が高い。突厥文字はアルファベットのような表音文字で右から左へ書かれる。

書字方向と動物などの描画方向がリンクしていることを示す事例はいくつかある。古代エジプトのヒエログリフは、表音文字であるが、鳥やへびなどの姿を表現している。ヒエログリフは縦にも横にも、左からも右からも書くことができたが、左から書くときは文字の鳥やへびは左を向いており、右から書くときは右を向いている(矢島, 1977)。ギリシア文字も、古い時期には左から右に書いたら次の行は右から左へと、牛が畑を耕すように交互に書いていく牛耕式と呼ばれる書字方法で書かれることがあったが、そのときはエジプトのヒエログリフと同様に、右から左へと書くときは、アルファベットも左右反転させている。日本では、基本的に右上から始まる縦書きであったが、肖像画の画賛については描かれた人物の顔の向いているほうが先頭行になる、つまり書かれた人物の顔が左向きであれば左から右へ書いていくという規則が存在していた(屋名池, 2006)。

そもそもどうして突厥文字やアラビア文字は右から左へ書き、ラテン語や英語は左から右へ書くようになったのか。ひょっとすると、何か別の要因があって、ある集団の動物の描画方向と書字の方向をともに制約しているのかもしれない。ギリシア文字もアラビア文字も、古い時期には書字方向が定まらない段階があった。そして、文字が発明されるずっと前に描かれた旧石器時代の洞窟壁画で

は、動物の向きに特定の傾向がみられないのだ。

動きのあるものについては、左から右へ移動しているように描かれる傾向がある、とする最近の研究もある(Walker, 2015)。ウォーカーの分析はグーグルの画像検索に基づいており、これは左から右へという普遍的な視覚運動バイアスによるもので、ゆえにスーパーマリオのような横方向に移動するビデオゲームは左から右へと進むように作られているのだという。この視覚運動バイアスは、果たして文化を超えた普遍的なものなのだろうか。それでは、右向きのヤギたちは、草原を駆けているイメージで描かれたのだろうか？

描画方向に限っても、多くの研究の余地が残されている。物質的痕跡から数千年、数万年前の人の行動を探ることができる考古学の利点を、ぜひ心の右・左をめぐる研究の深化に活かしていきたいと考えている。

文献

- エルツ, R / 吉田禎吾他訳 (1980) 『右手の優越: 宗教的両極性の研究』垣内出版
- 松本直子 (1996) 「描画方向の規定要因に関する認知考古学的検討」日本認知科学会13回大会ポスター発表
- Walker, P. (2015) Depicting visual motion in still images: Forward leaning and a left to right bias for lateral movement. *Perception*, 44, 111-128.
- 矢島文夫 (1977) 『文字学のたのしみ』大修館書店
- 屋名池誠 (2006) 「縦書きの奇妙な世界: 縦書き・横書きの日本語史」『図書』639, 50-57.